

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 羊の星座  |
| Author(s)   | 山本  |
| Citation    | 天界 = The heavens (1943), 23(260): 391-394   |
| Issue Date  | 1943-01-01  |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2433/168547">http://hdl.handle.net/2433/168547</a> |
| Right       |   |
| Type        | Departmental Bulletin Paper   |
| Textversion | publisher   |

# 羊の星座

(山 本 生)

I. Yamamoto : The Constellation "Aries".

昭和十八年の干支に因んで、羊の星座を語る。

羊座は黄道十二星座の第一席として、昔から最も有名であり、又、最も重要な位置を占めてゐる。毎年、一月の日暮れ過ぎ、我が國の頭上を飾る星象で、鯨、魚、アンドロメダ、牛などの間に介在し、首星「ハマル」は漸く二等級の輝きに過ぎないから、東天から追及して來る馭者、オリオン、大犬、小犬、双子などの諸星座のきらびやかさに比べると、可なり物淋しい感じであるけれど、しかし、これが却つて、羊の名には相應はしくて、何となく柔和で、おとなしいといふ印象を與へる。

古書に據ると、この羊は大昔には存在しなかつた星座で、魚座と牛座との間には大きな空き間であつたのを、ギリシャのテネードスに住むクレオストラートスが、學曆紀元前の第六世紀の頃、始めて此の星座を作つたのであると言ふ。

しかし、天行の法則から考へて見ると、この羊あたりには、紀元前二千年頃から千五六百年の間、春分點が在つた筈であるから、熱心なカルデヤの學者たちが此の空を見逃すわけはないのである。ブラウン氏の研究によれば、東邦人は此の天空に彎刀といふ星座を作つたと言はれるが、思ふに、バビロニア流の此のエキゾテイツクな名を棄て、むしろアルゴ遠征隊の物語りに有名な黄金の羊毛に因んで、ギリシャの文化人は羊の星座を創造したものであらう。古代の天文學統はギリシャに於いて完成せられ、ヒパルコスやトレミの碩學によつて羊座の位置は確立した。それと同時に、黃道を十二等分して、春分點を『白羊宮の、初點と呼ぶことが定められた。しかしながら、皮肉なことにも、此の十二宮が決定された頃には、歲差のために春分點は羊座を去つて、隣りの魚座に移つてゐたのである。しかも學的な定義を如何とも變更することが出来ないで、爾後、今日に至るも、尙、春分點は魚座にありながら、やはり『白羊宮の初點』といふ名を踏襲してゐる。もう五六百年も経てば、この初點は魚座を去つて、水瓶座に侵入することになるのだが。

まだ淋しい晩秋の空の一部を占めてゐる羊星座に於いて、最も代表的な星象は、二等級のア星と、三等級のベ星と、四等級のガ星とが形作る三角形である。良い形の三角形ではないけれど、明るさの配置に一種の或る釣り合ひが保たれてゐて、決して飽きさせない魅力が感ぜられる。支那でも、此の三角形は昔から一つの星宿と見られ、有名な二十八宿のうちの第十六番の「婁宿」といふ名で呼ばれてゐる。黄道から北へ九度ばかり離れてゐるため、月も、遊星たちも、此の星宿を侵すことはないけれど、可なり近くまで迫つて來て、このあたりの空を賑はしたことは度々あつたやうである。

この三角形の南西の端にあるガ星は、學暦一六六四年にロバート・フクが或る彗星を追跡中に發見した有名な二重星で、白色と灰色の、共に四等星が八秒半の間隔を有つて、正しい南北に相對峙してゐるのを、小さい望遠鏡で容易に見ることが出来る。

この星座の輝星であるア星は樺色の二等星であるが、三角視差は〇秒〇四四であるから、吾々から距離は約七十三光年、従つて我が太陽の約六十倍の光力

を發揮してゐる巨星である。——昔から此の星は「ハマル」と呼ばれてゐるが、其の意味は「羊」といふアラビヤ語である。即ち、この星はギリシャ・アラビヤの昔から、羊の星座の代表者として認められてゐたものに違ひない。

べ星は純白の三等星で、「シラタン」と呼ばれるが、其の意味は「歳首」で、これはガ星と共に、このあたりに春分點があつた時代に名づけられたものと思はれる。

羊座は、アベガの三星のある西部を除いて、淋しい空であるが、只、北に偏したあたりに第四十一番星と其の附近の二つ三つの星と合して、支那の天文學では二十八宿中の第十七番目の「胃宿」と呼ばれてゐる。黄道からは十度以上離れてゐる。

古書に畫かれてゐる「羊座」は、西へ體軀を向けて、只、首だけ東を振り返つてゐる羊を畫いてゐる。この姿は東から追つて來る「牛座」を怖れてゐるのか、又は、自己の金毛の美に見惚れてゐるのか？